

埼玉企業の経営戦略

急速な円安の進行や金利環境の変化などを背景に、国内外の経済情勢や産業構造が大きく変化している。企業経営を取り巻く環境が不透明さを増す中、埼玉県内の企業は高い技術力を生かし、市場ニーズに応えた新製品開発や設備投資を進め、さらなる成長を目指している。県内の優良企業に、2026年の抱負や経営戦略を聞いた。

八洲電業社

社長

吉村光司 氏



日本シーム

社長

木口 達也 氏



日さく

社長

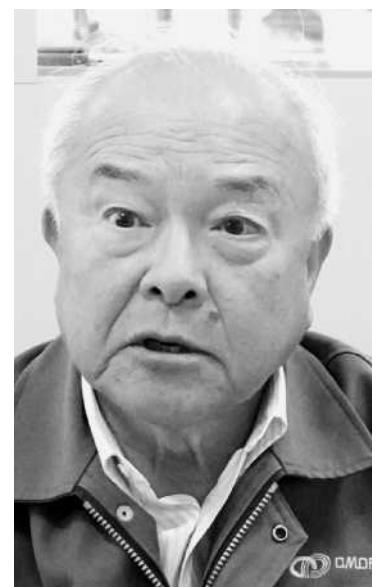
若林 直樹 氏



大森機械工業

社長

大森 利夫 氏



AI実装でDX先行モデルに

—AIを積極的に活用していますね。「業界で一番AIに強い会社」を掲げ、私たちはAIで生成したデータの業務管理システム『THOMAS』(トマス)を学び、社内教育を徹底している。今回の顔写真は、「3月1日に創業80周年を迎える次の時代へつなぐ」とあります。



創立80周年記念改修された本社ビル

—2026年の抱負は、「将来の展望は、確かな技術と最新テクノロジーを融合させ、社員一人ひとりが『新しい制度』を導入するなど、効率的なレイアウトに変更していく決意だ」です。

—企業データー

所在地=さいたま市北区日進町3の37の1、048-663-3361|資本金=6000万円|従業員数=49人(グループ63人)|設立=1946年(昭21)3月|URL=https://www.yashima-dengyosha.co.jp/

国内の循環型社会到達後押し

—昨年はクローズド・ループ・エコノミー(CLE, 完全循環経済)の周知と欧州の最新動向の紹介する初めてのフォーラムを開催しました。

—「11月に浜松市で開いた国際フォーラムは満席となり、動脈・静脈産業の垣根を越えた交流が生じています。

—SDGs事業部の発足から1年、手応えと貢献を重視していきます。

—AIを積極的に活用して、DXの効率化を図り、DXの先行モデルとしての役割を果たすことを目指す

具体的な結果は、

—SDGsは会社の看板を磨くイメージを取り組んできた。2022年はECCサイトを立ち上げ、廃プラスチックをアップサイクルした製品の販売を開始し、初の注文も受けた。昨年はオープントラックリーを2回、

—イベントにも15回出展して、デパートや子ども食堂などでも開催した。機械作りだけでなく、人々に手応えを感じてもらっている。特に、洗浄しながら

—SDGs事業部の発足から1年、手応えと貢献を重視していきます。

—AIを積極的に活用して、DXの効率化を図り、DXの先行モデルとしての役割を果たすことを目指す

—SDGs事業部の発

—事業内容は、木工事、地質調査などを手がけています。地下水や地盤に関する技術を強みとし、調査・計画から施工と維持管理までワンストップで対応している

—経営課題は、「建設業界全体で深刻化している人手不足だ。

—今後の成長をけん引

—「ヒト・ヒト・ヒト」で持続成長

